

ペリーシヨート賞

ピーターパンと泥凪のマリア 築谷祐里

マズローは親和の欲求で愛を人間の欲求のなかに位置づけたけど、だからといってこの男が妹に欲情を向けたことを正当化する理由にはならない。

淡々と人の顔が凹凸のついた肉団子に近づいていくのを見ていた。見ていた、というけど、実際にそれをしてるのは俺の手で、でも大抵そういうときの俺の頭と体は分離しているみたいな妙な感じがするんだ。

杏奈^{あんな}は白痴だ。脳味噌の成長が三歳くらいで止まっている。睫毛は頬に影がおちるほど長く、白磁みたいになめらかで白い肌、頬はいつも薔薇色の彩度をたたえている。黒くて肩を越すくらいの髪は子猫の毛みたいにやわらかいし、陽に透かしても透けなくらい純粋な黒色だ。

スニーカーはいつもパン粉の白で汚れている。家の近くにある作業所で妹は働いていた。作業所から帰ってくる妹はいつも微かに甘いパン粉とお日様の匂いをただよわせていた。それから俺には、ということ妹にも、もうひとり兄貴がいる。早く両親がいなくなつて、兄貴は小さい俺と妹の面倒をみていた。優秀だつたらしく、大学をさっさと卒業して医者になつた。こ

の小さな町からは少し離れた都市で外科医をやっているので、家は金に困つてはいない。

空き地に転がる空き缶をみつめて俺は思いついた。
「啜えろ」

すでに殴打で顔面じゅうを腫らしていた男は、ヒイヒイ言いながら地面を這いずつた。その芋虫みたいな無様さがどうしようもなく気に入らなくて、微妙な脂肪のついた腹に蹴りをいれる。男の性根も風体もなにもかもが気に入らなくて、醜い、と思つた。

「ガツ、ア、」

この間まで降り続いていた雨のせいか、空き缶は泥にまみれている。

「犬みたいにじゃなくて、赤ん坊みたいに啜えろんだよ」

しゃがんで口に缶を突っ込んでやりながら、ちいさな子供に言い聞かせるように囁いた。男はすすり泣いていた。

爪先で口に缶を押し込んで、勢いよく空に向かつて蹴り上げる。高くして小気味よい音と、グシャツともドシャツともつかない鈍い音が同時に空き地に響いた。

空中の高みで一回転して俺の右手に転がった空き缶には、男

の歯が数本突き刺さっていた。アルミ缶という材質は、意外にも軟いものだ。

こんなクソのような男でも、歯だけは綺麗なんだな。どうでもいい感慨にふける。わずかな血をだら、と口からこぼしたあと、男は動かなくなった。

杏奈は怯えたように震えながら、俺と、俺に害されている男を少し離れて見つめているけど、すこし時間が経てばこの光景も忘れてしまうのだろう。いままでもそうだったのだから。

すこし曇った表情で杏奈は言った。

「……アーは、あしたもおしごとこれる？」

「来れるよ。だいじょうぶ。明日もちゃんとお兄ちゃん迎えに来るから、安心してお仕事するとき」

俺はこの欲望も絶望も知らない妹を愛していたんだと思う。子供が皆純粋だとは思わない。だが杏奈だけは、醜い欲も、憎悪も挫折もその瞳に映すことなく大人の体になっていく。それが俺にはどうしようもなく尊くて、まぶしくて、大切だった。

居心地わるそうに、服の裾をつかんで固まっていた杏奈がぱつと顔を上げた。

「いちにーや」

いちにいと兄貴のことだ。兄貴の名前ははな一というのだけけれど、杏奈はいまでも小さい頃の呼び方で兄貴を呼ぶ。

なかなか帰ってこない俺たちを心配したのだろうか。迎えにきた兄貴が、地面に倒れる男を一瞥して言った。

「そいつ生きとんのか、死んどんのか」

「どっちでもええ」

「またこんなことやっとなのかお前は」

「杏奈にやらせるとかなんとか言って絡んでたコイツが悪いやろ」

どう考えても、と付け足した。悪びれるつもりもなかった。

「いい加減妹離れせえ」

しれっと大人のような物言いをする。自分だって、すこしまえまでは俺といっしょに、かわいい妹にたかるハエを叩き潰していたくせに。

「兄貴は杏奈が大事じゃないんか」

駄々をこねる子供のように、むきになって兄貴に嘯みつく。

「大事とかそういう範疇のはなしじゃないやろ。お前のやつとることは……ほんとに杏奈の為になるんか？ ならんやろ。妹離れしろつちゅうのは、そういうことじゃ」

兄貴の眼鏡の奥の目が細められる。

「お前のやつたことでまたべつに逆恨み買って、杏奈に矛先が向いたらどうするん？ お前は責任とれるんか」

呆れたように兄貴は言った。

「いや、責任とかいう話はどうでもええんじや。そんなもんについてまでも拘ってても埒があかんからな。俺が言いたいのは、お前はずつとこのやり方でなんとかするつもりなのかってことや」

俺は慥然としたまま立っていた。夏の終わりの夕暮れ、服のなかに籠る熱気が気持ち悪い。

いったんはおさめられた暴力的な衝動がまた湧き上がる。

「こんなこと続けてたら、そのうち誰も味方してくれんようになるで」

「味方？」

俺は信じられないような気分でつぶやいた。俺らの味方！

「俺らに味方がいままで一度でもいたんか。だれか味方になってくれたことがあったとでも言うんか」

「お前がこの町を憎んでるのはわかる」

兄貴はため息交じりに、けどな、と続けた。

「けどな、こんなこと続けてたってじゃあないやろ」

「……じゃあ兄貴はなんとかできるって言うんか。俺らが殴ったり蹴ったりして暴力に訴えなくても、杏奈は林に埋められなくてふつうに生活できるんか」

「それはやり方次第やろ」

「俺はそうは思わん」

叩きつけるように言い返す。

田舎の嫌なところはこういうところだ。血のつながりとか、近すぎる縁とか。

地方の有力者だった俺たちの父親は、こちら一帯で幅をきかせていた。それこそ労働者から仕事を奪うなんてことも、赤子の手をひねるように、という比喩が似合いすぎるほど容易なことだった。だからその鬱憤がその子供である俺たちに向かうのも、今になっては理解できることだ。けれど理解することとわかることはちがう。

小学三年生だった杏奈が雑木林に埋められたのは八年前のことだ。学校帰り、さらわれ、いわれない暴行をうけ、ゴミのように打ち捨てられた杏奈のことと、それをやった町の人間のことを俺は一生忘れないと思う。それにそのとき、仕事が忙しいとかで一週間家に帰ってこなかった父親のことも。

出張帰りのタクシーが事故だったとかで父親が死んだときも、大した感慨も湧かなかつた。ざまあみるとさえ思った。

九月も終わりの暮れの頃、死にぞこないの蝉の声がうるさい。リンドウの青い花が咲いている。

「……帰るで」

兄貴が踵をかえた。俺はぐすぐすと今更になってぐずりはじめた杏奈の手をひいて、もと来た道歩く。

茂るリンドウの控えめな青紫が目を引いた。いつか凶鑑でみたその花言葉を思い出す。

「あなたの悲しみに寄り添う」

人間が人間の悲しみに寄り添うことなんてあるのだろうか。

耳鳴りのように蝉の声が響く。脳に浸み込むような雑音がいつまでも鳴りやまない。

杏奈は泣いていた。赤ん坊のように、声を上げて泣いていた。

「どうして泣くん？」

杏奈のふわふわの黒い髪を撫でて、薄い肩を抱いた。

「おにいちゃんはいつでも杏奈の味方やよ」

目を閉じて囁く。杏奈の髪からはパン粉とお日様の匂いがした。母親の胎内に戻ったような安堵と、夢に現れるだれかを思

うようなやわらかな憧憬。心臓の裏側からあたたかいものが流れ出て、胸が満ちる感覚。ふと、さつき半殺しにした男の姿が
　　瞼の裏をかすめた。

　　ただ、俺のどうあがいたって大人になりきれない未来がそこに
　　転がっていた。